



学際知としての 比較文明学

小林 道憲

学際知としての比較文明学

—ポストモダニズムの後に—

小林 道憲

1 世界の合一化

シュペングラーとトインピー

今年（二〇一四年）は、第一次世界大戦が勃発して、ちょうど百年になる。第一次世界大戦とは一体何だったのだろうか。第一次大戦は、予想に反して、当時開発されつつあった科学技術を駆使した物量戦・総力戦になり、一千万人以上の戦死者を出す大戦争になってしまった。あとに残ったものは、ヨーロッパ全土の荒廃のみであった。第一次大戦は、戦勝国も戦敗国も含めて、ヨーロッパ全体の自壊だったのではないか。この大戦を契機に、ヨーロッパは、もはや、十九世紀のように世界の中心ではありえなくなり、急激に世界の中心から後退していった。ヨーロッパ人の自信喪失は見る影もなかった。

このヨーロッパ人の自信喪失を反映するかのように、シュペングラーの『西洋の没落』（第一巻）が出版されたのは、一九一八年、第一次世界大戦がヨーロッパの荒廃のみを残して終結した年であった。ここで展開されたシュペングラーの文明史観は、歴史を構成する単位を文明にみ、各文明は同時代的・相対的位置しか占めないと考えるものであった。しかも、各文明はそれぞれ一個の有機体をなし、幼年・青年・壮年・老年、あるいは春・夏・秋・冬のサイクルを描き、各段階は平行性をもつとともに、必ず死に至る。ヨーロッパ文明も、この数多くの文明の中の一つにすぎず、しかも、それはすでに冬の段階にきていた。したがって、古代のギリシア・ローマ文明が没落したように、ヨーロッパ文明も、物質中心の大衆社会をつく

り、創造力を失って没落することは不可避であるという。

こうして、各文明間での進歩や発展、優位や劣位、伝播や出会いさえ否定するシュペングラーの文明史観を切っ掛けにして、ヨーロッパ人の歴史観は、それまでの一元論的なヨーロッパ中心史観から多元論的な相対史観へと大きく転換していった。同時に、それは、ヨーロッパ文明が、すでに中心文明から脱落しつつあることを告げたのである。シュペングラーの文明史観は、ヨーロッパ自身が内からも外からも飲み込まれていた解体の表現であり、自分達の文明が終末を迎えることのあるというヨーロッパの人の危機感の表現でもあった。と同時に、それはまた、ヨーロッパ人自身の自己反省でもあり、ヨーロッパ人の自己相対化の試みでもあったと言えよう。

諸文明の相対性と文明間の平行性を段階ごとに比較し、世界史の構造を叙述するという比較文明学の基本テーゼが提出されたのは、ヨーロッパでは、このシュペングラーの『西洋の没落』のにおいてであつただろう。これを機に、比較文明学が誕生したとも言える。その意味でも、第一次大戦のヨーロッパ人に与えた衝撃は大きかった。

トインビーも、第一次大戦の衝撃と、そこから生み出されたシュペングラーの文明史観に大きな影響を受けて、その後長い年月をかけて完成される『歴史の研究』の中で、独自の比較文明論を展開した。トインビーは、シュペングラーとともに、歴史の単位を、国家よりも広い文明にみ、しかも、比較する文明の数をシュペングラーよりも増やし、十分開花したものとしては二十三個をあげた。とともに、諸文明を三つの世代に分け、そこに親子関係を認めて、各文明は発生・成長・衰退・解体・消滅を繰り返すとした。

こうして、トインビーも、ヨーロッパ文明は人類が生み出した数多くの文明の一つにすぎないとみて、ヨーロッパ中心の世界史観を打破していったのである。トインビーの比較文明学も、ヨーロッパ人自身によるヨーロッパ中心主義の克服の試みであった。ヨーロッパ中心主義を批判し、それを相対化していったのも、主にヨーロッ

パ人自身だったのである。それは、ヨーロッパ文明自身の自己反省だったと言える。

地球文明の成立

しかし、ヨーロッパ文明は、二十世紀初頭の第一次大戦を境にして本当に没落してしまったのだろうか。十九世紀には、ヨーロッパ諸国は、産業革命以来の産業主義を発展させ、その巨大な生産性ゆえに、その文明を世界中に拡大していった。このヨーロッパ近代文明の巨大な膨張力の源泉には、ヨーロッパ諸国が誇る産業技術力があった。ヨーロッパ諸国は、それを背景に世界中の他の文明圏へ進出、軍事的にも政治的にも経済的にも、その優位を誇り、科学技術をはじめ、ヨーロッパ近代の価値観まで広めていったのである。

十九世紀はヨーロッパ文明の世界化の時代であり、ヨーロッパ文明が中心文明にのし上がり、周辺の諸文明を自己の圏域に収めるとともに、それらを逐次周辺文明化していった時代だったのである。十九世紀のヘーゲルの歴史哲学やマルクスの唯物史観に見られるように、オリエント—ギリシア・ローマ—ヨーロッパという世界史の単線的発展段階図式は、この十九世紀のヨーロッパ近代文明の世界史的優位の表現にほかならなかった。そこには、ヨーロッパ近代こそ世界史が到達した最高の段階だとするヨーロッパ中心史観があった。だが、それ自身、世界史的優位を誇っていた十九世紀ヨーロッパの歴史の單なる反映にすぎなかつたのである。

この世界中に拡大したヨーロッパ近代文明の膨張力は、自由主義や平等主義に根差した合理的な産業技術文明であったから、ヨーロッパ外の諸文明もこれを受容し、それに同化せざるをえなかつた。十九世紀は、また、非ヨーロッパから見れば、周辺文明化した非ヨーロッパ諸文明のヨーロッパ化の時代でもあった。

しかも、二十世紀に至って、これら非ヨーロッパの諸文明は、受容したヨーロッパ近代文明の諸装置を同化するとともに、発展させ、逆にヨーロッパ勢力に逆襲してきた。アメリカやロシア（旧ソ連）

や日本の抬頭、さらに、アジア・アフリカ諸国の自立と発展は、そのことを表現していた。そのために、かえってヨーロッパ自身が矮小化し、その世界支配力を急速に失っていったのが、二十世紀であった。十九世紀に誰はばかることなく世界史的優位を誇り、中心文明化していたヨーロッパが、二十世紀に至って急激に脱中心化してしまったのである。ヨーロッパの自己崩壊にはかならなかつた第一次大戦の意味は、そこにある。

その意味では、コラールが『ヨーロッパの略奪』で言ったように、ヨーロッパは、他のヨーロッパ外の世界に略奪されることによって脱落していったのだと言えよう。十九・二十世紀の世界史の本質は、ヨーロッパの世界化と世界のヨーロッパ化の潮流の中にあって、世界中の諸文明が同じ一つの産業技術文明によって覆い尽くされていったことにある。その過程で、ヨーロッパは逆に縮小していったのである。

二十一世紀の初頭に当たる今日、運輸・交通手段や情報・通信手段の発達などによって、世界は急速に一体化しつつある。高度に進展した科学技術文明を、アメリカや日本、ロシアや中国が世界に拡散させ、EUやASEANなどにみられるように、地域統合も進展している現代では、もはやヨーロッパ・非ヨーロッパ、中心・周辺という概念では把握のできないような世界の合一化が進展している。人類の文明的営みは、合一化という一点に向かって収斂しつつあるとも言える。二十一世紀は世界の合一化の時代になるであろう。

科学技術や都市化、産業主義や民主主義は、ヨーロッパや非ヨーロッパを問わず、世界の多数の国々によって推進されている。さらに、世界中のどの大都市へ行っても、同じような空港があり、高層ビルが立ち並び、高速道路や高速鉄道がそれらをつないでいる。この巨大な産業技術文明によって覆い尽くされつつある一様化された文明こそ、過去の多くの地域的な諸文明を統合し、一つの地球文明を形成しつつある当のものである。

2 科学技術への反省

科学と技術の結合

この近代文明の拡大と世界の合一化を起こしてきたものは産業主義であり、それを支えた科学技術の力であった。科学技術は、文明の膨張をもたらすとともに、それ自身、文明の膨張の流れの中にあった。

もっとも、科学は、自然の観測や実験からその法則を知る学であり、技術は、自然を利用し管理し、人間にとって有用なものをそこから引き出す術であって、それらは、本来、区別されねばならないものである。この科学と技術が結びついで、今日のような大きな地位を占めるに至ったのは、どんなに早くにその出発点を見出しても、十八世紀末のヨーロッパの産業革命以前には遡らないであろう。産業革命以後、科学と技術は結合し、かくて、観測や実験によって自然の法則を知り、これを自然の支配や管理に利用するということが始まったのである。その意味でも、科学技術は、ヨーロッパ近代文明特有の性格をもっている。

確かに、近代科学の源泉を、デカルトやニュートンに代表される十七世紀の科学革命に見ることはできるであろう。ここで、精神と物質を切断する二元論的世界觀が成立し、自然を単なる物質と見る科学が成立した。この二元論的世界觀を基礎に、対象を限定しそれを分析、要素に還元してこれを定量化、機械論的な決定論に基づく法則を定立するというのが、近代自然科学の方法論であった。この方法論が確立したのが、ヨーロッパの十七世紀だったとすれば、その意味でも、近代科学はヨーロッパの所産であったと言える。

しかし、この近代科学の源泉としてのデカルトやニュートン像は、十八世紀末の啓蒙主義以後から、近代科学に近い所論や方法論だけを切り離して取り出してきた像にすぎないとも言える。例えば、ニュートンは、まだなお創造主たる神の計画を被造物たる自然の中に見るという宗教的な世界觀の中で、その力学を理解していた。その

意味では、十七世紀の科学革命時の科学と十九世紀以後の科学は同じものではない。

近代科学が成立するのは、むしろ、科学の知識が技術と結びつき、ヨーロッパにおいて巨大な産業技術文明が勃興してからのことと考えるべきであろう。十八世紀末、西ヨーロッパにおいて起こされた産業革命や市民革命を境にして、巨大な産業技術文明が成立、それに伴い、政治・社会・文化一般にわたっての巨大な変革がなされていった。それとともに、科学と技術が結びつき、科学が、人間による自然支配を可能にする技術に寄与するとともに、その技術が、また、科学の自然探求を加速していった。さらに、産業革命や市民革命を総合する形で、ヨーロッパ諸国が国民国家を形成していくにしたがって、科学技術は、教育などの面でも制度化されていった。科学者とか技術者という概念をはじめ、そういう新しい社会階層が出現したのも、十九世紀ヨーロッパにおける産業社会の形成とともにある。科学者や技術者は、近代社会が生んだ產物なのである。

このようにして、科学は技術と手を携え、人間による自然支配や開発を可能にした。しかも、この人間による自然支配を可能にした近代の科学技術は、ヨーロッパ近代文明に大きな膨張力を付与した。科学技術の成立によって、ヨーロッパ近代文明は自立し、他の文明に対する絶対的優位を確立、その必然性にしたがって、他の周辺の文明に自己を拡大していったのである。

近代ヨーロッパ文明が、その卓越した科学技術力によって圧倒的な強さを示し、地球上の他のあらゆる地域にこの文明を浸透させ、世界を一変させたのが十九世紀であった。それに対して、ヨーロッパ外の諸文明が、この科学技術に支配された産業主義文明をヨーロッパ以上に進展させ、ヨーロッパの相対的縮小をもたらしたのが、二十世紀だったのである。かくて、二十一世紀初頭の今日では、もはやヨーロッパとも非ヨーロッパとも区別のつかない科学技術文明が、一つの地球文明の装置として成立するに至っている。

科学技術の専門化

科学技術は現代文明を形成する核であり、現代文明を動かす重要な機能である。科学技術も文明の中にある。したがって、文明が空間的にも時間的にも膨張していくとき、科学技術も膨張し、同時に文明の膨張を加速していく。

科学技術が際限もなく専門分化していったのも、この文明の膨張と深い関係にある。現代文明が機能主義的に構造分化していくにしたがって、科学技術も多くの専門領域に分化し、それに応じて多くの専門職ができていった。近代国家も、そのような科学技術なくして近代社会は成立しないことを知り、大学や研究所や教育機関を設立し、専門的な科学者や技術者を養成するに至った。しかも、研究規模が大きくなるにしたがって、研究分野は個々の専門へと細分化し、細分化とともに、組織は巨大化していった。

かくて、今日では、科学も、宇宙科学などのマクロ世界から、分子生物学や素粒子論などのミクロ世界まで、その考察の範囲を極大化してきた。また、技術も、宇宙開発などの極大世界から、ナノテクノロジーなどの極小世界まで、その開発分野を最大限広げるにいたっている。そして、それとともに、科学も技術も極限にまで専門分化してきているのが、今日の科学技術の世界である。

文明の空間的時間的拡大と学問の細分化は比例している。文明の膨張とともに、研究開発すべき範囲は膨大化、知識量も極限化し、誰一人として全体を見渡すことはできなくなってしまった。現代の科学や技術は、それぞれ自らの限界を設定し、対象を限定、探求の方法を確立しているから、それぞれの分野の開拓に邁進できるという利点があった。そのことによって、研究の能率化ははかられ、考察すべき範囲と知識量の膨大化に対応することができたのである。

しかし、同時に、そのことによって、科学者や技術者が次第に視野狭窄に陥っていったという面も否定できない。当該分野の知識には詳しいが、全体として何をどうすればよいのかについては盲目な専門家が誕生したのは、そのためである。学会も、個々の分野に細

分化されるとともに、それぞれ閉じた世界に閉じ籠り、その狭い領域で競争を激化させていった。だが、このようにして成立した近代の科学技術が大きな社会的力を發揮し、科学技術が一人歩きしてきたのが、ここ二百年ほどの文明の動きであった。

それでいて、科学技術そのものが全体としてどこへ進もうとしているのか、その行き着く先が何なのか、全体として何をしていることになるのかは、科学者も技術者も問わないし、彼ら自身にも分からぬ。また、科学者も技術者も、自己の専門領域については事細かく知っているが、全体については、群盲象をなでるかのように知ろうともしない。さらに、科学技術が人間の生にとってどのような意味をもっているのかというような問い合わせに対しても、科学者も技術者も比較的無関心であるか、せいぜい楽観的な夢を語るだけであった。際限もなく専門分化していった科学や技術を生み出していった現代文明の問題性は、この全体像の喪失というところにあるだろう。

科学技術の新しい方向

この全体像の喪失という科学技術が抱えている問題状況を露呈したのは、一九七〇年代以来の地球環境問題や資源エネルギー問題、人口問題など、人類の生存にかかわる地球問題群の発生であった。これらの問題群は、科学技術文明が起こした問題でもあるのだが、当の細分化した専門科学や技術だけでは解けない問題であり、十九世紀以来の科学技術文明の限界露呈でもあった。これらの問題は地球文明的問題であり、地球表面全体が巨大な科学技術文明によって覆い尽された分、発生した問題だったと言えよう。

十九・二十世紀を通して制度化してきた専門個別科学は、自らの研究対象と自らの理論的枠組み、さらにその方法論の基準を定め、自らのディシプリン（discipline）をそれぞれ確立して、その分、細分化していった。それらは、複雑に連関した事象から複雑性と連関性を排除し、対象を分離、これを要素に還元して、それを総合すれば全体が理解できると考えた。十九世紀以来、このような個別科学

的方法によって、自然科学はもちろん、社会学や経済学や政治学や心理学など、人文社会諸科学も自律化、自らの専門領域の確立をはかつてきただのである。

しかし、このような専門科学の方法論では解けなくなつたのが、地球環境問題をはじめとする地球問題群だったのである。これらの問題は、機能分化した領域を自らの方法論に即して研究するだけでは解明できないような問題群であった。

インターディシプリンアリ・サイエンス (interdisciplinary science) の必要性が言われ出したのも、そのためである。インターディシプリンアリ・サイエンス（学際研究）は、各専門分野の領域を越えて、多くの専門領域を動員、領域間の連関性を探り、当該問題を総合的に解明しようとする科学の新しい方向であった。それは、分析から総合へ、相互の関係を重視し、全体像をつかもうとする新たな知の組み換えの動きであった。確かに、この方向で、二十世紀末以来、学際研究は、可能な限りの研究領域を結集、生命、環境、情報、認知、行動、地域などについての総合的研究を推進してきた。

さらに、一般システム理論や自己組織化理論やシナジェティックス、カオス理論やオートポイエーシス論や複雑系科学など、科学自身が新しい方向を探り出したのも、二十世紀後半からの新しい動向であった。これらの科学（システム論）は、対象の分離よりも関係性を重視し、単純なものから複雑なものへ、静的なものから動的なものへと考察を転換、決定性よりも非決定性を、可逆性よりも不可逆性を重んじた。さらに、それは、その考え方を、自然から人文社会現象にまで及ぼそうとする総合科学の方向をとった。これらの科学の新しい方向は、認知基準の脱構築を含み、連関性を無視した旧来の科学を克服しようとするものであった。それは、科学の自己反省でもあり、科学における近代を問う動きでもあり、一種の科学におけるポストモダニズムだったと言えよう。科学も、実は、一定したものではなく、文明の変動の中にあるものだと言わねばならない。

3 比較文明学と哲学

学際知としての比較文明学

人類の文明的営みを貫き、今までに形成されてきた諸文明を連ねて、文明とは何かを考察する比較文明学も、当然、インターディシプリンアリ・サイエンス（学際研究）でなければならない。比較文明学は、もともと、専門知化した科学や技術への批判を含んで成り立ってきた学であるから、それ自身、一定の指導原理や方法論に基づいた学問ではない。

科学技術によって支配され一様化されるとともに、様々の地球問題群を抱え込んだ現代文明はどのようにして形成され、どこへ向かっているのか。また、この一様化された現代文明の中にあって、それに取り囲まれるように存在している多様な各種文化は、どのような役割を果たしているのか。多様な文化の共存は、どのようにして可能か。さらに、石器の発明以来今日の地球文明に至るまで的人類の文明的営みは、一体何だったのか、また、それはどのようにして形成してきたのか。比較文明学は、このような問題を考えようとする。

それは、人間の誕生以来今日の地球文明の形成に至るまでの諸文明を相対的に、その関係性に注目しつつ考察しようとする超領域的分野であるから、それは、当然、一研究領域に限定された科学では解けないものを含んでいる。だから、比較文明学は、各領域の交流と相互対話を試み、各領域からの報告を総合し、相互の連関性を探ることによって、このような課題に応えねばならない。そのためには、比較文明学は、多様な研究分野を横断し、それらを複合し、そこから、共通なもの、類似や相似を見出し、文明の構造や変動、形態や様式の考察を行なわねばならない。つまり、既存の諸学問分野を統合し、総合的な知を形成していく必要があるのである。

なるほど、文化人類学や科学論・科学史、国際政治学や地域研究などは、早くに学際知として成立したと言えるが、今日では、それ

ら自身がまた専門領域化してしまったという弊害がみられないわけではない。だから、比較文明学は、それらも含めて、各領域を再び学際的にコーディネイトし、文明とは何かについて考えねばならない。そして、われわれが生きてきた、そして現に生きている文明的状況の理解に努めねばならない。

文明そのものは、技術、経済、社会、政治、科学、芸術、思想、宗教など、あらゆる分野を組み込んで、それを一つの制度や装置に組み立てたものだから、当然、文明とは何かを考えるには、諸学問の総合が必要である。自然科学や生態学、工学、経済学、社会学、政治学、芸術学、哲学、宗教学、さらに、心理学、歴史学や考古学、また、文化人類学や国際政治学や地域研究などの学際的研究、あらゆる学問の総合が必要である。科学が際限もなく専門分化していく時代だからこそ、文明という包括的な概念のもと、諸科学を結集する意味はあるであろう。

もちろん、個人では、これらあらゆる学問に通じるということ是不可能である。しかし、それぞれの専門領域に属する多様な立場からの専門家の参加を求め、各専門家の報告を得ながら、多くの分野の相互協力による学際的探求は不可能ではない。各研究者は、何らかの専門を一つもって、そこから〈文明〉をキーワードに自らを拡張し、他の分野との交流をはかり、他の分野との共通性を探りながら総合知を作り出せればよい。この辺が、較文明学の立ち位置だと言えよう。

その意味で、比較文明学は、単一のディシプリンではできない学際的な学問である。だからこそ、比較文明学は、これまで積み重ねられてきた諸科学との連携を欠くことができない。多くの専門領域の共同によって、多様な専門領域の相互連関を探り、文明とは何かが解明されねばならない。

逆に言えば、比較文明学的視野に開かれてくる問題の解明のためには、専門のあり方そのものが問われねばならないということでもある。個々の専門分化した諸科学は、自らの研究対象を自らの学的

枠組みの中だけで処理し、学問の自律性をはかつてきただが、その各専門分化した科学は、それ自身、機能主義的に分化した近代文明の構造の中にあった。だが、それゆえにこそ、専門分化した科学は、文明そのものを問うてはこなかったのである。

それに対して、比較文明学は、その基調にある文明そのものを問う。だから、比較文明学においては、他の専門領域から自己自身を明確に区別し、自己の専門領域の確立を目指す旧来の科学観は通用しない。比較文明学は、〈区別〉ではなく〈総合〉を目指す学際知として成立しなければならないのである。

比較文明学は、もともと文明に対する危機意識に促されて、既成の学問のあり方を乗り越えようとするところから生まれたものである。近代文明を問い合わせ、そこで成立した科学や技術のあり方も問う総合知として成立した比較文明学は、当然、人文・社会・自然のほとんどあらゆる科学の分野を総合していかねばならないであろう。確かに、比較文明学は、各専門分野の細かな具体事例には、それほど深くは踏み込めない。しかし、全体として、諸科学の報告する事例の文明論的な意味は探ることはできる。比較文明学が学際知として成立する根拠は十分あると言える。

文明とは何か

では、一体、文明とは何なのだろうか。二十世紀後半からの新しい科学のコンセプトを導入するなら、人類の営んできた文明は、環境との相互作用および諸文明の相互作用から自己自身を自己自身で形成していく〈自己組織系〉とみることができるであろう。

人類は、自然環境から働きかけられるとともに自然環境に働きかけ、その相互作用から、様々な段階での装置や制度、つまり文明を生み出してきた。生命そのものが、もともと、環境との相互作用によって、環境に適応するとともに環境を作っていく営みであったが、人間の文明的営みも、そこから出現している。

例えば、旧石器時代の狩猟民が植物栽培を覚え、定住するとともに、原始的な社会制度を作り、自然環境に制約されたあり方から新しい文明を作ってきたのが、新石器時代の文明である。そこには、環境が文明に働きかける作用と、文明が環境に働きかける作用両方があり、その相互作用からの文明の飛躍つまり農業革命があった。そこでは、人類は、植物栽培という新しい技術を生み出すことによって、環境の変化に適応していくとともに、環境を改変し、新しい文明的環境を作ってきたのである。

新しい技術は、環境の変化を受けて、それに対応することによって生み出されるとともに、そのことによってまた新しい環境を創造していく。この技術の革新とともに、経済も社会も政治も変容され、世界観や価値観つまり文化さえも変わり、文明の飛躍は起きる。今日の巨大な産業技術文明も、環境からの働きかけに対する環境への新しい働きかけであった。現代文明も、なお、文明と環境の相互作用の中にあると考えねばならない。人類の歴史は、文明と環境の相互作用の軌跡であり、それ自身、一つの地球生態系の中にある運動だと考えるべきであろう。

人類はまた、文明と文明の相互作用からも、新しい形の文明を作ってきた。文明と文明は、人、金、物、情報、技術などの交換を通して、相互に影響し合い、歴史を形成していく。人類文明の何度かの飛躍も、この文明間相互作用からも起きてきた。人類の文明は、それぞれ孤立して発展してきたものではなく、相互に出会い、相互に受容し合い、発展してきたのである。諸文明が、多様な様式を作り多様に枝分かれしていくのも、この文明間の出会いによる。

このように、文明と環境の相互作用および文明間相互作用から自己自身を形成する〈自己組織系〉として、人類の営む文明を理解することができるであろう。そして、その文明の内部に潜む構造や原理を抽出するとともに、それぞれの文明の様式や統合の仕方の違い、変動の相似や差異などを、諸文明の比較から記述し、人類史を理解しようとするのが、比較文明学なのである。それを可能にするため

には、当然、人文・社会・自然のあらゆる学問の共同がなければならぬ。

しかし、単にいくつかの文明を並列して、その同一性と差異性を記述しただけでは十分ではない。比較は、同一性や差異性の認識だけにとどまらない。比較は、単に差異性の中に個別性を見出すことでも、同一性の中に普遍性を見出すことでもない。比較文明学の〈比較〉という方法は、多くの文明から、その関係性を抽出していく作業である。同一性と差異性の認識には、すでに両者の関係性の認識が含まれているのだから、〈比較〉は、〈関係の認識〉でなければならぬ。

比較文明学は、多様な文明が存在することを前提とし、それらを相対化し、各文明の通時的・共時的比較の中から、諸文明の相互関係を明らかにしていく。人類の文明史を見るとき、二つ以上の文明の歴史的事象の間には対応が見られ、そこには類似の現象が見られる。比較文明学は、諸文明を比較することによって、それらの類似の現象を取り出し、各文明に共通のものを探求することによって、人類の営む文明とは何かを考える。このようにして、比較という操作によって文明の構造と機能を明らかにし、人類史を貫く文明の本質を解明するのが比較文明学である。

人間は、文明を創り出す動物である。人間は、物を作り、物を知り、物を交換し、社会をつくり、統治を行ない、儀礼を執り行ない、神話を作り、信仰する。それに応じて、学問や科学、経済や政治、芸術や宗教を生み出してきた。人類の文明は、これらを総合して組織立てた全体である。それは、歴史的にも、未分化な状態から分化発展し、階層をつくり、飛躍してきた。文明とは何かを考えることは、人間とは何かを考えることでもある。

自然を技術や知識によって工作し、人為によって改変していく過程が文明であり、それは、各構成要素が有機的につながった一つの組織体である。われわれは、これを全体として総合的に把握しなければならない。人間の営みは、決して、最初から専門分化している

わけではない。専門分化しているのは科学の方である。人間はもともと総合的なものであり、分裂してはいない。人類の歴史も一つの大河の流れのようなものであり、何も、最初から西洋史・東洋史・日本史と分かれているわけではない。

比較文明学は、空間的にも時間的にも、個々の分野で蓄積された知識を、全体として把握し、文明とは何かを認識しなければならない。細分化された科学ではつかみきれない文明の全体像を認識しなければならないのである。比較文明学は、諸文明の比較を通して、共通なものを探り、人間の本質理解に至りつこうとする。比較文明学は、結局、人間の探求に帰着する。

哲学の役割

哲学はもともと総合の学であった。諸分野を通観し、物事の本質を知り、人間とは何かを考えてきた。だから、洋の東西を問わず、少なくとも近代以前には、哲学者はみな総合の人であった。ヨーロッパでも、十九世紀以前の哲学者は、みな総合家であった。各科学が哲学から独立していったのは、十八世紀末、産業革命やフランス革命以後のことであつただろう。それ以来、哲学から、自然科学をはじめ、社会学や経済学や政治学や心理学など、人文社会諸科学も自立し、個別化していった。

かくて、近代以来、哲学は身細になってきたのだが、もしも、それでもなお、哲学が生きる場所があるとすれば、どうすればよいのか。哲学は、哲学から自立していった諸科学をもう一度学際的に総合し直し、元の本来の総合学に戻る必要があるであろう。部分部分を細かく見ていく個別科学を総合して、全体を通観し、そこから共通なものを抽出し、物事の本質を見ていかねばならないのである。その点で、同じように総合の学を目指す比較文明学は、本来の哲学の立ち位置に近い。

自然も、人間も、社会も、もともと総合的なものである。だから、人文・社会・自然諸科学が、知識のための知識を目指して、ただ自

己の専門分野の知識を事細かく探求するだけでは、本来、自然も人間も社会も把握できない。諸科学も総合され、自然や人間や社会の理解に資すものとならねばならない。

学際知としての比較文明学が、多くの学問分野からの報告を総合して、そこから共通なものを見出し、文明とは何か、人間とは何かについて総合的に考えるのであれば、それは、人間や自然や社会に関する総合知たりうるであろう。そして、同じように、既存の知に対し疑問を投げかけ、新しい知の地平を開こうとしている総合知としての哲学も、比較文明学の進展に貢献するものをもっているであろう。人間の知的営みは、諸知識を何らかの観点から総合することなくして、真の知とはなりえない。諸科学の虫の目と哲学の鳥の目を統合し、それを比較文明学に寄与させるなら、現代が失った総合知を復活させることもできるであろう。

哲学思想分野でも、一九七〇年代以後特に注目され一種の流行をみてきたポストモダニズムも、確かに、ヨーロッパ近代によって構築されてきた文明の構造を揺さぶってきた。それは、近代の行きすぎた機能分化と効率化、合理化の潮流に対する批判であり、近代の理性的構築物の脱構築に対する動きであった。それはまた、専門分化した科学技術によって構築されてきたヨーロッパ近代の自己反省でもあったと言えよう。

しかし、比較文明学は、ポストモダニズムが流行をみる以前の二十世紀初頭から、すでにヨーロッパ近代を問題にしてきた。比較文明学は、その誕生からして、早くに登場してきた一種のポストモダニズムだったのである。比較文明学は、ポストモダニズムの潮流の後も、創造し続ける学際知として、新しい知を生み出していかねばならない。学際知としての比較文明学は、単なる知の脱構築ではなく、知の再構築を目指さねばならないのである。

註

- 1 シュペングラー『西洋の没落』第一巻（村松正俊訳） 五月書房 一九九三年 緒論 参照。『西洋の没落』は一九一八年に第一巻が出版され、一九二二年に、第二巻も含めて完結出版された。この著の中では、シュペングラーは、われわれが〈文明〉と言っているものを〈高度文化〉と言っており、その末期状況つまり冬の時代を、むしろ〈文明〉と名付けている。
- 2 ただし、このシュペングラーの考えに先立って、同じような諸文明の相対性と文明間の平行性を叙述していたものとして、ロシアのダニレフスキーの『ロシアとヨーロッパ』（一八七一年）がある。シュペングラーが、近代文明がもたらしたヨーロッパ文明の危機意識から、この比較文明学のテーゼを生み出したのに対して、ダニレフスキーは、逆に、ヨーロッパ近代文明がもたらすロシア文明の危機意識から、同じ考え方を、シュペングラーを先駆する形で、約五十年前に提出していたことになる。
- 3 トインビー『歴史の研究』（長谷川松治訳） 世界の名著 5 中央公論社 一九七一年 第一篇 序論 参照
- 4 拙著『20世紀を読む—ヨーロッピズムの時代とその終焉』泰流社 一九八九年 第一章 参照
- 5 コラール『ヨーロッパの略奪』（小島威彦訳） 未来社 一九六二年 第二章
- 6 村上陽一郎『文明のなかの科学』青土社 一九九四年 7 参照
- 7・8 同書 1、2 参照
- 9 拙著『複雑系の哲学』（正統）麗澤大学出版会 二〇〇七年 二〇〇九年 参照
- 10 神川正彦『比較文明の方法』刀水書房 一九九五年 II—、二 参照
- 11 梅棹忠夫『文明学の課題と展望』著作集第5巻 中央公論社 一九八九年 三八一頁—三八三頁

- 12 拙著『文明の交流史観』ミネルヴァ書房 二〇〇六年 参照
- 13 伊東俊太郎『比較文明』著作集第7巻 麗澤大学出版会 二〇〇八年 第三章 参照
- 14 梅棹忠夫『文明学の課題と展望』著作集第5巻 中央公論社 一九八九年 四八五頁

学際知としての比較文明学

—ポストモダニズムの後に—

小林 道憲

1 世界の合一化

シュペングラーとトインピー

今年（二〇一四年）は、第一次世界大戦が勃発して、ちょうど百年になる。第一次世界大戦とは一体何だったのだろうか。第一次大戦は、予想に反して、当時開発されつつあった科学技術を駆使した物量戦・総力戦になり、一千万人以上の戦死者を出す大戦争になってしまった。あとに残ったものは、ヨーロッパ全土の荒廃のみであった。第一次大戦は、戦勝国も戦敗国も含めて、ヨーロッパ全体の自壊だったのではないか。この大戦を契機に、ヨーロッパは、もはや、十九世紀のように世界の中心ではありえなくなり、急激に世界の中心から後退していった。ヨーロッパ人の自信喪失は見る影もなかった。

このヨーロッパ人の自信喪失を反映するかのように、シュペングラーの『西洋の没落』（第一巻）が出版されたのは、一九一八年、第一次世界大戦がヨーロッパの荒廃のみを残して終結した年であった。ここで展開されたシュペングラーの文明史観は、歴史を構成する単位を文明にみ、各文明は同時代的・相対的位置しか占めないと考えるものであった。しかも、各文明はそれぞれ一個の有機体をなし、幼年・青年・壮年・老年、あるいは春・夏・秋・冬のサイクルを描き、各段階は平行性をもつとともに、必ず死に至る。ヨーロッパ文明も、この数多くの文明の中の一つにすぎず、しかも、それはすでに冬の段階にきている。したがって、古代のギリシア・ローマ文明が没落したように、ヨーロッパ文明も、物質中心の大衆社会をつく

り、創造力を失って没落することは不可避であるという。

こうして、各文明間での進歩や発展、優位や劣位、伝播や出会いさえ否定するシュペングラーの文明史観を切っ掛けにして、ヨーロッパ人の歴史観は、それまでの一元論的なヨーロッパ中心史観から多元論的な相対史観へと大きく転換していった。同時に、それは、ヨーロッパ文明が、すでに中心文明から脱落しつつあることを告げたのである。シュペングラーの文明史観は、ヨーロッパ自身が内からも外からも飲み込まれていた解体の表現であり、自分達の文明が終末を迎えることのあるというヨーロッパの人の危機感の表現でもあった。と同時に、それはまた、ヨーロッパ人自身の自己反省でもあり、ヨーロッパ人の自己相対化の試みでもあったと言えよう。

諸文明の相対性と文明間の平行性を段階ごとに比較し、世界史の構造を叙述するという比較文明学の基本テーゼが提出されたのは、ヨーロッパでは、このシュペングラーの『西洋の没落』のにおいてであつただろう。これを機に、比較文明学が誕生したとも言える。その意味でも、第一次大戦のヨーロッパ人に与えた衝撃は大きかった。

トインビーも、第一次大戦の衝撃と、そこから生み出されたシュペングラーの文明史観に大きな影響を受けて、その後長い年月をかけて完成される『歴史の研究』の中で、独自の比較文明論を展開した。トインビーは、シュペングラーとともに、歴史の単位を、国家よりも広い文明にみ、しかも、比較する文明の数をシュペングラーよりも増やし、十分開花したものとしては二十三個をあげた。とともに、諸文明を三つの世代に分け、そこに親子関係を認めて、各文明は発生・成長・衰退・解体・消滅を繰り返すとした。

こうして、トインビーも、ヨーロッパ文明は人類が生み出した数多くの文明の一つにすぎないとみて、ヨーロッパ中心の世界史観を打破していったのである。トインビーの比較文明学も、ヨーロッパ人自身によるヨーロッパ中心主義の克服の試みであった。ヨーロッパ中心主義を批判し、それを相対化していったのも、主にヨーロッ

パ人自身だったのである。それは、ヨーロッパ文明自身の自己反省だったと言える。

地球文明の成立

しかし、ヨーロッパ文明は、二十世紀初頭の第一次大戦を境にして本当に没落してしまったのだろうか。十九世紀には、ヨーロッパ諸国は、産業革命以来の産業主義を発展させ、その巨大な生産性ゆえに、その文明を世界中に拡大していった。このヨーロッパ近代文明の巨大な膨張力の源泉には、ヨーロッパ諸国が誇る産業技術力があった。ヨーロッパ諸国は、それを背景に世界中の他の文明圏へ進出、軍事的にも政治的にも経済的にも、その優位を誇り、科学技術をはじめ、ヨーロッパ近代の価値観まで広めていったのである。

十九世紀はヨーロッパ文明の世界化の時代であり、ヨーロッパ文明が中心文明にのし上がり、周辺の諸文明を自己の圏域に収めるとともに、それらを逐次周辺文明化していった時代だったのである。十九世紀のヘーゲルの歴史哲学やマルクスの唯物史観に見られるように、オリエント—ギリシア・ローマ—ヨーロッパという世界史の単線的発展段階図式は、この十九世紀のヨーロッパ近代文明の世界史的優位の表現にほかならなかった。そこには、ヨーロッパ近代こそ世界史が到達した最高の段階だとするヨーロッパ中心史観があった。だが、それ自身、世界史的優位を誇っていた十九世紀ヨーロッパの歴史の單なる反映にすぎなかつたのである。

この世界中に拡大したヨーロッパ近代文明の膨張力は、自由主義や平等主義に根差した合理的な産業技術文明であったから、ヨーロッパ外の諸文明もこれを受容し、それに同化せざるをえなかつた。十九世紀は、また、非ヨーロッパから見れば、周辺文明化した非ヨーロッパ諸文明のヨーロッパ化の時代でもあった。

しかも、二十世紀に至って、これら非ヨーロッパの諸文明は、受容したヨーロッパ近代文明の諸装置を同化するとともに、発展させ、逆にヨーロッパ勢力に逆襲してきた。アメリカやロシア（旧ソ連）

や日本の抬頭、さらに、アジア・アフリカ諸国の自立と発展は、そのことを表現していた。そのために、かえってヨーロッパ自身が矮小化し、その世界支配力を急速に失っていったのが、二十世紀であった。十九世紀に誰はばかることなく世界史的優位を誇り、中心文明化していたヨーロッパが、二十世紀に至って急激に脱中心化してしまったのである。ヨーロッパの自己崩壊にはかならなかつた第一次大戦の意味は、そこにある。

その意味では、コラールが『ヨーロッパの略奪』で言ったように、ヨーロッパは、他のヨーロッパ外の世界に略奪されることによって脱落していったのだと言えよう。十九・二十世紀の世界史の本質は、ヨーロッパの世界化と世界のヨーロッパ化の潮流の中にあって、世界中の諸文明が同じ一つの産業技術文明によって覆い尽くされていったことにある。その過程で、ヨーロッパは逆に縮小していったのである。

二十一世紀の初頭に当たる今日、運輸・交通手段や情報・通信手段の発達などによって、世界は急速に一体化しつつある。高度に進展した科学技術文明を、アメリカや日本、ロシアや中国が世界に拡散させ、EUやASEANなどにみられるように、地域統合も進展している現代では、もはやヨーロッパ・非ヨーロッパ、中心・周辺という概念では把握のできないような世界の合一化が進展している。人類の文明的営みは、合一化という一点に向かって収斂しつつあるとも言える。二十一世紀は世界の合一化の時代になるであろう。

科学技術や都市化、産業主義や民主主義は、ヨーロッパや非ヨーロッパを問わず、世界の多数の国々によって推進されている。さらに、世界中のどの大都市へ行っても、同じような空港があり、高層ビルが立ち並び、高速道路や高速鉄道がそれらをつないでいる。この巨大な産業技術文明によって覆い尽くされつつある一様化された文明こそ、過去の多くの地域的な諸文明を統合し、一つの地球文明を形成しつつある当のものである。

2 科学技術への反省

科学と技術の結合

この近代文明の拡大と世界の合一化を起こしてきたものは産業主義であり、それを支えた科学技術の力であった。科学技術は、文明の膨張をもたらすとともに、それ自身、文明の膨張の流れの中にあった。

もっとも、科学は、自然の観測や実験からその法則を知る学であり、技術は、自然を利用し管理し、人間にとって有用なものをそこから引き出す術であって、それらは、本来、区別されねばならないものである。この科学と技術が結びついで、今日のような大きな地位を占めるに至ったのは、どんなに早くにその出発点を見出しても、十八世紀末のヨーロッパの産業革命以前には遡らないであろう。産業革命以後、科学と技術は結合し、かくて、観測や実験によって自然の法則を知り、これを自然の支配や管理に利用するということが始まったのである。その意味でも、科学技術は、ヨーロッパ近代文明特有の性格をもっている。

確かに、近代科学の源泉を、デカルトやニュートンに代表される十七世紀の科学革命に見ることはできるであろう。ここで、精神と物質を切断する二元論的世界觀が成立し、自然を単なる物質と見る科学が成立した。この二元論的世界觀を基礎に、対象を限定しそれを分析、要素に還元してこれを定量化、機械論的な決定論に基づく法則を定立するというのが、近代自然科学の方法論であった。この方法論が確立したのが、ヨーロッパの十七世紀だったとすれば、その意味でも、近代科学はヨーロッパの所産であったと言える。

しかし、この近代科学の源泉としてのデカルトやニュートン像は、十八世紀末の啓蒙主義以後から、近代科学に近い所論や方法論だけを切り離して取り出してきた像にすぎないとも言える。例えば、ニュートンは、まだなお創造主たる神の計画を被造物たる自然の中に見るという宗教的な世界觀の中で、その力学を理解していた。その

意味では、十七世紀の科学革命時の科学と十九世紀以後の科学は同じものではない。

近代科学が成立するのは、むしろ、科学の知識が技術と結びつき、ヨーロッパにおいて巨大な産業技術文明が勃興してからのことと考えるべきであろう。十八世紀末、西ヨーロッパにおいて起こされた産業革命や市民革命を境にして、巨大な産業技術文明が成立、それに伴い、政治・社会・文化一般にわたっての巨大な変革がなされていった。それとともに、科学と技術が結びつき、科学が、人間による自然支配を可能にする技術に寄与するとともに、その技術が、また、科学の自然探求を加速していった。さらに、産業革命や市民革命を総合する形で、ヨーロッパ諸国が国民国家を形成していくにしたがって、科学技術は、教育などの面でも制度化されていった。科学者とか技術者という概念をはじめ、そういう新しい社会階層が出現したのも、十九世紀ヨーロッパにおける産業社会の形成とともにある。科学者や技術者は、近代社会が生んだ產物なのである。

このようにして、科学は技術と手を携え、人間による自然支配や開発を可能にした。しかも、この人間による自然支配を可能にした近代の科学技術は、ヨーロッパ近代文明に大きな膨張力を付与した。科学技術の成立によって、ヨーロッパ近代文明は自立し、他の文明に対する絶対的優位を確立、その必然性にしたがって、他の周辺の文明に自己を拡大していったのである。

近代ヨーロッパ文明が、その卓越した科学技術力によって圧倒的な強さを示し、地球上の他のあらゆる地域にこの文明を浸透させ、世界を一変させたのが十九世紀であった。それに対して、ヨーロッパ外の諸文明が、この科学技術に支配された産業主義文明をヨーロッパ以上に進展させ、ヨーロッパの相対的縮小をもたらしたのが、二十世紀だったのである。かくて、二十一世紀初頭の今日では、もはやヨーロッパとも非ヨーロッパとも区別のつかない科学技術文明が、一つの地球文明の装置として成立するに至っている。

科学技術の専門化

科学技術は現代文明を形成する核であり、現代文明を動かす重要な機能である。科学技術も文明の中にある。したがって、文明が空間的にも時間的にも膨張していくとき、科学技術も膨張し、同時に文明の膨張を加速していく。

科学技術が際限もなく専門分化していったのも、この文明の膨張と深い関係にある。現代文明が機能主義的に構造分化していくにしたがって、科学技術も多くの専門領域に分化し、それに応じて多くの専門職ができていった。近代国家も、そのような科学技術なくして近代社会は成立しないことを知り、大学や研究所や教育機関を設立し、専門的な科学者や技術者を養成するに至った。しかも、研究規模が大きくなるにしたがって、研究分野は個々の専門へと細分化し、細分化とともに、組織は巨大化していった。

かくて、今日では、科学も、宇宙科学などのマクロ世界から、分子生物学や素粒子論などのミクロ世界まで、その考察の範囲を極大化してきた。また、技術も、宇宙開発などの極大世界から、ナノテクノロジーなどの極小世界まで、その開発分野を最大限広げるにいたっている。そして、それとともに、科学も技術も極限にまで専門分化してきているのが、今日の科学技術の世界である。

文明の空間的時間的拡大と学問の細分化は比例している。文明の膨張とともに、研究開発すべき範囲は膨大化、知識量も極限化し、誰一人として全体を見渡すことはできなくなってしまった。現代の科学や技術は、それぞれ自らの限界を設定し、対象を限定、探求の方法を確立しているから、それぞれの分野の開拓に邁進できるという利点があった。そのことによって、研究の能率化ははかられ、考察すべき範囲と知識量の膨大化に対応することができたのである。

しかし、同時に、そのことによって、科学者や技術者が次第に視野狭窄に陥っていったという面も否定できない。当該分野の知識には詳しいが、全体として何をどうすればよいのかについては盲目な専門家が誕生したのは、そのためである。学会も、個々の分野に細

分化されるとともに、それぞれ閉じた世界に閉じ籠り、その狭い領域で競争を激化させていった。だが、このようにして成立した近代の科学技術が大きな社会的力を發揮し、科学技術が一人歩きしてきたのが、ここ二百年ほどの文明の動きであった。

それでいて、科学技術そのものが全体としてどこへ進もうとしているのか、その行き着く先が何なのか、全体として何をしていることになるのかは、科学者も技術者も問わないし、彼ら自身にも分からぬ。また、科学者も技術者も、自己の専門領域については事細かく知っているが、全体については、群盲象をなでるかのように知ろうともしない。さらに、科学技術が人間の生にとってどのような意味をもっているのかというような問い合わせに対しても、科学者も技術者も比較的無関心であるか、せいぜい楽観的な夢を語るだけであった。際限もなく専門分化していった科学や技術を生み出していった現代文明の問題性は、この全体像の喪失というところにあるだろう。

科学技術の新しい方向

この全体像の喪失という科学技術が抱えている問題状況を露呈したのは、一九七〇年代以来の地球環境問題や資源エネルギー問題、人口問題など、人類の生存にかかわる地球問題群の発生であった。これらの問題群は、科学技術文明が起こした問題でもあるのだが、当の細分化した専門科学や技術だけでは解けない問題であり、十九世紀以来の科学技術文明の限界露呈でもあった。これらの問題は地球文明的問題であり、地球表面全体が巨大な科学技術文明によって覆い尽された分、発生した問題だったと言えよう。

十九・二十世紀を通して制度化してきた専門個別科学は、自らの研究対象と自らの理論的枠組み、さらにその方法論の基準を定め、自らのディシプリン（discipline）をそれぞれ確立して、その分、細分化していった。それらは、複雑に連関した事象から複雑性と連関性を排除し、対象を分離、これを要素に還元して、それを総合すれば全体が理解できると考えた。十九世紀以来、このような個別科学

的方法によって、自然科学はもちろん、社会学や経済学や政治学や心理学など、人文社会諸科学も自律化、自らの専門領域の確立をはかつてきただのである。

しかし、このような専門科学の方法論では解けなくなつたのが、地球環境問題をはじめとする地球問題群だったのである。これらの問題は、機能分化した領域を自らの方法論に即して研究するだけでは解明できないような問題群であった。

インターディシプリンアリ・サイエンス (interdisciplinary science) の必要性が言われ出したのも、そのためである。インターディシプリンアリ・サイエンス（学際研究）は、各専門分野の領域を越えて、多くの専門領域を動員、領域間の連関性を探り、当該問題を総合的に解明しようとする科学の新しい方向であった。それは、分析から総合へ、相互の関係を重視し、全体像をつかもうとする新たな知の組み換えの動きであった。確かに、この方向で、二十世紀末以来、学際研究は、可能な限りの研究領域を結集、生命、環境、情報、認知、行動、地域などについての総合的研究を推進してきた。

さらに、一般システム理論や自己組織化理論やシナジェティックス、カオス理論やオートポイエーシス論や複雑系科学など、科学自身が新しい方向を探り出したのも、二十世紀後半からの新しい動向であった。これらの科学（システム論）は、対象の分離よりも関係性を重視し、単純なものから複雑なものへ、静的なものから動的なものへと考察を転換、決定性よりも非決定性を、可逆性よりも不可逆性を重んじた。さらに、それは、その考え方を、自然から人文社会現象にまで及ぼそうとする総合科学の方向をとった。これらの科学の新しい方向は、認知基準の脱構築を含み、連関性を無視した旧来の科学を克服しようとするものであった。それは、科学の自己反省でもあり、科学における近代を問う動きでもあり、一種の科学におけるポストモダニズムだったと言えよう。科学も、実は、一定したものではなく、文明の変動の中にあるものだと言わねばならない。

3 比較文明学と哲学

学際知としての比較文明学

人類の文明的営みを貫き、今までに形成されてきた諸文明を連ねて、文明とは何かを考察する比較文明学も、当然、インターディシプリンアリ・サイエンス（学際研究）でなければならない。比較文明学は、もともと、専門知化した科学や技術への批判を含んで成り立ってきた学であるから、それ自身、一定の指導原理や方法論に基づいた学問ではない。

科学技術によって支配され一様化されるとともに、様々の地球問題群を抱え込んだ現代文明はどのようにして形成され、どこへ向かっているのか。また、この一様化された現代文明の中にあって、それに取り囲まれるように存在している多様な各種文化は、どのような役割を果たしているのか。多様な文化の共存は、どのようにして可能か。さらに、石器の発明以来今日の地球文明に至るまで的人類の文明的営みは、一体何だったのか、また、それはどのようにして形成してきたのか。比較文明学は、このような問題を考えようとする。

それは、人間の誕生以来今日の地球文明の形成に至るまでの諸文明を相対的に、その関係性に注目しつつ考察しようとする超領域的分野であるから、それは、当然、一研究領域に限定された科学では解けないものを含んでいる。だから、比較文明学は、各領域の交流と相互対話を試み、各領域からの報告を総合し、相互の連関性を探ることによって、このような課題に応えねばならない。そのためには、比較文明学は、多様な研究分野を横断し、それらを複合し、そこから、共通なもの、類似や相似を見出し、文明の構造や変動、形態や様式の考察を行なわねばならない。つまり、既存の諸学問分野を統合し、総合的な知を形成していく必要があるのである。

なるほど、文化人類学や科学論・科学史、国際政治学や地域研究などは、早くに学際知として成立したと言えるが、今日では、それ

ら自身がまた専門領域化してしまったという弊害がみられないわけではない。だから、比較文明学は、それらも含めて、各領域を再び学際的にコーディネイトし、文明とは何かについて考えねばならない。そして、われわれが生きてきた、そして現に生きている文明的状況の理解に努めねばならない。

文明そのものは、技術、経済、社会、政治、科学、芸術、思想、宗教など、あらゆる分野を組み込んで、それを一つの制度や装置に組み立てたものだから、当然、文明とは何かを考えるには、諸学問の総合が必要である。自然科学や生態学、工学、経済学、社会学、政治学、芸術学、哲学、宗教学、さらに、心理学、歴史学や考古学、また、文化人類学や国際政治学や地域研究などの学際的研究、あらゆる学問の総合が必要である。科学が際限もなく専門分化していく時代だからこそ、文明という包括的な概念のもと、諸科学を結集する意味はあるであろう。

もちろん、個人では、これらあらゆる学問に通じるということ是不可能である。しかし、それぞれの専門領域に属する多様な立場からの専門家の参加を求め、各専門家の報告を得ながら、多くの分野の相互協力による学際的探求は不可能ではない。各研究者は、何らかの専門を一つもって、そこから〈文明〉をキーワードに自らを拡張し、他の分野との交流をはかり、他の分野との共通性を探りながら総合知を作り出せればよい。この辺が、較文明学の立ち位置だと言えよう。

その意味で、比較文明学は、単一のディシプリンではできない学際的な学問である。だからこそ、比較文明学は、これまで積み重ねられてきた諸科学との連携を欠くことができない。多くの専門領域の共同によって、多様な専門領域の相互連関を探り、文明とは何かが解明されねばならない。

逆に言えば、比較文明学的視野に開かれてくる問題の解明のためには、専門のあり方そのものが問われねばならないということでもある。個々の専門分化した諸科学は、自らの研究対象を自らの学的

枠組みの中だけで処理し、学問の自律性をはかつてきただが、その各専門分化した科学は、それ自身、機能主義的に分化した近代文明の構造の中にあった。だが、それゆえにこそ、専門分化した科学は、文明そのものを問うてはこなかったのである。

それに対して、比較文明学は、その基調にある文明そのものを問う。だから、比較文明学においては、他の専門領域から自己自身を明確に区別し、自己の専門領域の確立を目指す旧来の科学観は通用しない。比較文明学は、〈区別〉ではなく〈総合〉を目指す学際知として成立しなければならないのである。

比較文明学は、もともと文明に対する危機意識に促されて、既成の学問のあり方を乗り越えようとするところから生まれたものである。近代文明を問い合わせ、そこで成立した科学や技術のあり方も問う総合知として成立した比較文明学は、当然、人文・社会・自然のほとんどあらゆる科学の分野を総合していかねばならないであろう。確かに、比較文明学は、各専門分野の細かな具体事例には、それほど深くは踏み込めない。しかし、全体として、諸科学の報告する事例の文明論的な意味は探ることはできる。比較文明学が学際知として成立する根拠は十分あると言える。

文明とは何か

では、一体、文明とは何なのだろうか。二十世紀後半からの新しい科学のコンセプトを導入するなら、人類の営んできた文明は、環境との相互作用および諸文明の相互作用から自己自身を自己自身で形成していく〈自己組織系〉とみることができるであろう。

人類は、自然環境から働きかけられるとともに自然環境に働きかけ、その相互作用から、様々な段階での装置や制度、つまり文明を生み出してきた。生命そのものが、もともと、環境との相互作用によって、環境に適応するとともに環境を作っていく営みであったが、人間の文明的営みも、そこから出現している。

例えば、旧石器時代の狩猟民が植物栽培を覚え、定住するとともに、原始的な社会制度を作り、自然環境に制約されたあり方から新しい文明を作ってきたのが、新石器時代の文明である。そこには、環境が文明に働きかける作用と、文明が環境に働きかける作用両方があり、その相互作用からの文明の飛躍つまり農業革命があった。そこでは、人類は、植物栽培という新しい技術を生み出すことによって、環境の変化に適応していくとともに、環境を改変し、新しい文明的環境を作ってきたのである。

新しい技術は、環境の変化を受けて、それに対応することによって生み出されるとともに、そのことによってまた新しい環境を創造していく。この技術の革新とともに、経済も社会も政治も変容され、世界観や価値観つまり文化さえも変わり、文明の飛躍は起きる。今日の巨大な産業技術文明も、環境からの働きかけに対する環境への新しい働きかけであった。現代文明も、なお、文明と環境の相互作用の中にあると考えねばならない。人類の歴史は、文明と環境の相互作用の軌跡であり、それ自身、一つの地球生態系の中にある運動だと考えるべきであろう。

人類はまた、文明と文明の相互作用からも、新しい形の文明を作ってきた。文明と文明は、人、金、物、情報、技術などの交換を通して、相互に影響し合い、歴史を形成していく。人類文明の何度かの飛躍も、この文明間相互作用からも起きてきた。人類の文明は、それぞれ孤立して発展してきたものではなく、相互に出会い、相互に受容し合い、発展してきたのである。諸文明が、多様な様式を作り多様に枝分かれしていくのも、この文明間の出会いによる。

このように、文明と環境の相互作用および文明間相互作用から自己自身を形成する〈自己組織系〉として、人類の営む文明を理解することができるであろう。そして、その文明の内部に潜む構造や原理を抽出するとともに、それぞれの文明の様式や統合の仕方の違い、変動の相似や差異などを、諸文明の比較から記述し、人類史を理解しようとするのが、比較文明学なのである。それを可能にするため

には、当然、人文・社会・自然のあらゆる学問の共同がなければならぬ。

しかし、単にいくつかの文明を並列して、その同一性と差異性を記述しただけでは十分ではない。比較は、同一性や差異性の認識だけにとどまらない。比較は、単に差異性の中に個別性を見出すことでも、同一性の中に普遍性を見出すことでもない。比較文明学の〈比較〉という方法は、多くの文明から、その関係性を抽出していく作業である。同一性と差異性の認識には、すでに両者の関係性の認識が含まれているのだから、〈比較〉は、〈関係の認識〉でなければならぬ。

比較文明学は、多様な文明が存在することを前提とし、それらを相対化し、各文明の通時的・共時的比較の中から、諸文明の相互関係を明らかにしていく。人類の文明史を見るとき、二つ以上の文明の歴史的事象の間には対応が見られ、そこには類似の現象が見られる。比較文明学は、諸文明を比較することによって、それらの類似の現象を取り出し、各文明に共通のものを探求することによって、人類の営む文明とは何かを考える。このようにして、比較という操作によって文明の構造と機能を明らかにし、人類史を貫く文明の本質を解明するのが比較文明学である。

人間は、文明を創り出す動物である。人間は、物を作り、物を知り、物を交換し、社会をつくり、統治を行ない、儀礼を執り行ない、神話を作り、信仰する。それに応じて、学問や科学、経済や政治、芸術や宗教を生み出してきた。人類の文明は、これらを総合して組織立てた全体である。それは、歴史的にも、未分化な状態から分化発展し、階層をつくり、飛躍してきた。文明とは何かを考えることは、人間とは何かを考えることでもある。

自然を技術や知識によって工作し、人為によって改変していく過程が文明であり、それは、各構成要素が有機的につながった一つの組織体である。われわれは、これを全体として総合的に把握しなければならない。人間の営みは、決して、最初から専門分化している

わけではない。専門分化しているのは科学の方である。人間はもともと総合的なものであり、分裂してはいない。人類の歴史も一つの大河の流れのようなものであり、何も、最初から西洋史・東洋史・日本史と分かれているわけではない。

比較文明学は、空間的にも時間的にも、個々の分野で蓄積された知識を、全体として把握し、文明とは何かを認識しなければならない。細分化された科学ではつかみきれない文明の全体像を認識しなければならないのである。比較文明学は、諸文明の比較を通して、共通なものを探り、人間の本質理解に至りつこうとする。比較文明学は、結局、人間の探求に帰着する。

哲学の役割

哲学はもともと総合の学であった。諸分野を通観し、物事の本質を知り、人間とは何かを考えてきた。だから、洋の東西を問わず、少なくとも近代以前には、哲学者はみな総合の人であった。ヨーロッパでも、十九世紀以前の哲学者は、みな総合家であった。各科学が哲学から独立していったのは、十八世紀末、産業革命やフランス革命以後のことであつただろう。それ以来、哲学から、自然科学をはじめ、社会学や経済学や政治学や心理学など、人文社会諸科学も自立し、個別化していった。

かくて、近代以来、哲学は身細になってきたのだが、もしも、それでもなお、哲学が生きる場所があるとすれば、どうすればよいのか。哲学は、哲学から自立していった諸科学をもう一度学際的に総合し直し、元の本来の総合学に戻る必要があるであろう。部分部分を細かく見ていく個別科学を総合して、全体を通観し、そこから共通なものを抽出し、物事の本質を見ていかねばならないのである。その点で、同じように総合の学を目指す比較文明学は、本来の哲学の立ち位置に近い。

自然も、人間も、社会も、もともと総合的なものである。だから、人文・社会・自然諸科学が、知識のための知識を目指して、ただ自

己の専門分野の知識を事細かく探求するだけでは、本来、自然も人間も社会も把握できない。諸科学も総合され、自然や人間や社会の理解に資すものとならねばならない。

学際知としての比較文明学が、多くの学問分野からの報告を総合して、そこから共通なものを見出し、文明とは何か、人間とは何かについて総合的に考えるのであれば、それは、人間や自然や社会に関する総合知たりうるであろう。そして、同じように、既存の知に対し疑問を投げかけ、新しい知の地平を開こうとしている総合知としての哲学も、比較文明学の進展に貢献するものをもっているであろう。人間の知的営みは、諸知識を何らかの観点から総合することなくして、真の知とはなりえない。諸科学の虫の目と哲学の鳥の目を統合し、それを比較文明学に寄与させるなら、現代が失った総合知を復活させることもできるであろう。

哲学思想分野でも、一九七〇年代以後特に注目され一種の流行をみてきたポストモダニズムも、確かに、ヨーロッパ近代によって構築されてきた文明の構造を揺さぶってきた。それは、近代の行きすぎた機能分化と効率化、合理化の潮流に対する批判であり、近代の理性的構築物の脱構築に対する動きであった。それはまた、専門分化した科学技術によって構築されてきたヨーロッパ近代の自己反省でもあったと言えよう。

しかし、比較文明学は、ポストモダニズムが流行をみる以前の二十世紀初頭から、すでにヨーロッパ近代を問題にしてきた。比較文明学は、その誕生からして、早くに登場してきた一種のポストモダニズムだったのである。比較文明学は、ポストモダニズムの潮流の後も、創造し続ける学際知として、新しい知を生み出していかねばならない。学際知としての比較文明学は、単なる知の脱構築ではなく、知の再構築を目指さねばならないのである。

註

- 1 シュペングラー『西洋の没落』第一巻（村松正俊訳） 五月書房 一九九三年 緒論 参照。『西洋の没落』は一九一八年に第一巻が出版され、一九二二年に、第二巻も含めて完結出版された。この著の中では、シュペングラーは、われわれが〈文明〉と言っているものを〈高度文化〉と言っており、その末期状況つまり冬の時代を、むしろ〈文明〉と名付けている。
- 2 ただし、このシュペングラーの考えに先立って、同じような諸文明の相対性と文明間の平行性を叙述していたものとして、ロシアのダニレフスキーの『ロシアとヨーロッパ』（一八七一年）がある。シュペングラーが、近代文明がもたらしたヨーロッパ文明の危機意識から、この比較文明学のテーゼを生み出したのに対して、ダニレフスキーは、逆に、ヨーロッパ近代文明がもたらすロシア文明の危機意識から、同じ考え方を、シュペングラーを先駆する形で、約五十年前に提出していたことになる。
- 3 トインビー『歴史の研究』（長谷川松治訳） 世界の名著 5 中央公論社 一九七一年 第一篇 序論 参照
- 4 拙著『20世紀を読む—ヨーロッピズムの時代とその終焉』泰流社 一九八九年 第一章 参照
- 5 コラール『ヨーロッパの略奪』（小島威彦訳） 未来社 一九六二年 第二章
- 6 村上陽一郎『文明のなかの科学』青土社 一九九四年 7 参照
- 7・8 同書 1、2 参照
- 9 拙著『複雑系の哲学』（正統）麗澤大学出版会 二〇〇七年 二〇〇九年 参照
- 10 神川正彦『比較文明の方法』刀水書房 一九九五年 II—、二 参照
- 11 梅棹忠夫『文明学の課題と展望』著作集第5巻 中央公論社 一九八九年 三八一頁—三八三頁

- 12 拙著『文明の交流史観』ミネルヴァ書房 二〇〇六年 参照
- 13 伊東俊太郎『比較文明』著作集第7巻 麗澤大学出版会 二〇〇八年 第三章 参照
- 14 梅棹忠夫『文明学の課題と展望』著作集第5巻 中央公論社 一九八九年 四八五頁